

巻頭言

耕作推進隊の出現

財団法人 いも類振興会

理事長 生天目 健 蔵

世の中には、偶然の一致か、当然の推移なのか分らないが、自分の考えた通りの現実が実現していることにびっくりしている。

本誌25号の巻頭言に「人手不足と農業」と題して、国内の労働力の不足には、農業推進隊を組織して、農家の潜在的労働力を、もっと活用することが第一であると訴えた。間もなく、愛知県にそれが実現したのである。

新聞の切抜きを見失ったので、正確ではないかも知れないが、39歳の青年が中心となり、43歳、23歳の3人で組合を組織し、専属農業婦人一人、アルバイトの農婦一人を雇って、居住地の扶桑町の200戸の農家の転作畑地を借り受け、これを耕作して年間5千万円の収入をあげ、今後は隣町村の転作畑まで借受けて、事業を拡大するという。

畑の転作とは、何のことか不明な所もあるが、この「耕作推進隊」の出現は、従来の個々の農家の耕作より、合理的、機能的な農作業の配分という一つの目的を解決したことになる。

人手不足の解決として、海外に移住した旧日本人の二世、三世をわが国に呼び戻すことが考えられ、NHK等でも、その成果を報道したが、日本語の話せない二世、三世では、やはり困難なことが実証されている。どんな第三国人でもいいとなると、将来、混血児の出現で、統一が困難になる怖れがある。やは

り、国内の人口移動、労働再配置によって、国内で解決することを選ぶべきことである。そうすると、国内の農業労働力を調整することが何よりも必要なことになるのである。

旧来、農繁期には、「猫の手も借りたい」という言葉で表現されてきた。田植え、稲刈りなどの農繁期には、一時期たしかに人手が足りなくて、困る時期がある。然し、これも機械力を使用し、収穫の時季を勘案する事で解決される。そうすると、残るのは、耕作推進隊のリーダーシップに掛るわけである。

200戸の農家の転作畑というからには、地続きというわけには行かないが、基盤整備をすれば、もっと効率的、機能的な農作業を推進することが出来ることと思う。そういう意味では、農家全体の協力があれば、もっと軽く、楽な農作業が予期できるわけである。それからして、従来の単位農協の在り方も検討し直す必要がある。

これに関連して、農業の在り方に、も一つ考慮しなければならないことがある。昔から士農工商と言って、農業は他の分野と別個の領分と観念されてきたが、今後はバイテクの領分で工業化し、消費の分野と密接な連繫をとって、農工商を兼備することが必要である。そうするには、農家が全一体となって、組織化することが必要なのだと痛感する次第である。希望もあるが、困難な道でもある。